

研究タイトル：

モダリティ表現の形態と意味について



| | | | |
|----------|--------------------------|---------|---------------------------|
| 氏名： | 香本直子／KOMOTO Naoko | E-mail： | komoto@ishikawa-nct.ac.jp |
| 職名： | 講師 | 学位： | 博士(言語学) |
| 所属学会・協会： | 日本英語学会, 日本英文学会, アメリカ言語学会 | | |
| キーワード： | 形式意味論, モダリティ | | |

**技術相談
提供可能技術：**

- ・
- ・
- ・

研究内容：モダリティ表現の形態と意味について
概要

日本語および英語その他のモダリティ表現について、その形態や意味を、形式意味論の枠組みを用いて記述する研究を行っている。モダリティは「今、ここ」に縛られない現実世界と異なる状況の記述を可能にし、人間の言語を特徴あるものとしている。日本語のモダリティ表現は、英語の can, may, must といったモダリティ表現と違って、知識に関わる認知的な用法と規範に関わる義務的な用法で用いる表現が異なり、また「かもしれない」「にちがいない」「してもよい」「しなくてはいけない」などのように複雑な形をしているものが多い。日本語および英語その他のモダリティ表現について、それぞれの共通点や相違点、モダリティを表すための自然言語のバリエーション、論理言語との相違点を明らかにすることを課題としている。

背景

モダリティ表現の意味を説明する際、これまで形式意味論では Kratzer (1977, 1981, 1991) の理論が標準的なものとして採用されてきた。Kratzer の理論は命題の可能性や必然性を「可能世界」の量化として捉える様相論理を用いた上で、自然言語のモダリティ表現の意味の曖昧性を捉えることのできる理論だが、現象としては主に欧米諸語の表現を扱うものとなっている。一方で、Rullmann, Matthewson, and Davis (2008) や Deal (2011) は欧米諸語以外のモダリティ表現を観察し、Kratzer の理論を単純にあてはめるだけでは説明することができないものがあることを指摘している。また Frank (1997) や Zvolenszky (2002) において指摘され、Kratzer (2012) でも認められているように、英語のモダリティ表現にも単純に Kratzer (1977, 1981, 1991) の理論を適用することができないものがあることが分かってきている。日本語を分析しそれを他の言語と比較することで、これまで提案されてきた分析がどの程度普遍的かまた個別的吗、自然言語ではモダリティを表すのにどのような表現を用いることができるのか、を明らかにすることができる。

類型論的に興味深い「いい」を中心にした、パラダイム記述

現在特に、日本語において生産的で類型論的に興味深い「いい」を含むモダリティ表現を分析の対象としている。日本語のモダリティ表現を観察していて特徴的だと思われることの一つに、日本語には「いい」を含むモダリティ表現が大変生産的であるという点が挙げられる。例えば、「…してもいい」(許可)、「…しなくてはいけない」(義務)、「…すればいい」(助言)、「…できればいい」(希望)といった表現がある。これは形態論上もしくは形態統語論上、英語やドイツ語などの欧米諸語と大変異なっているように見える点である。例えば単純な「…すればいい」の意味については、概略 ‘if ..., (it is) good.’ と捉え、このモダリティは「…すれば」の表す状況を拡張した世界が、「いい」世界の集合のメンバーであることを表す、と考えることができる。英語とは異なるやり方で、似かよった意味を生み出していることになる。

提供可能な設備・機器：

| 名称・型番(メーカー) | |
|-------------|--|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |